

## 編集後記

本号で区切りとなる30号となります。巻頭言は山口教授に、また特別寄稿を依田教授にお願いいたしました。

巻頭言では「建設事故に思う」と題して、昨年土木工事で発生した大きな事故や、労働災害の発生状況、建設業の就業者の動向などを通して建設業の課題について指摘され、事故調査に携わっていたという経験から、ICTによるモニタリング技術を活用した事故減少のための検討事項と、その内容について貴重なご意見を頂いております。

特別寄稿では「鋼材の癖を読み、鋼橋の長寿命化を図る」と題して、鋼材にも癖があり、鋼橋の補修・補強時はその癖を読み解くことが必要であること、またその癖を見抜く技を身に付ける第一の方法は鋼橋が好きになること、そしてその癖を見る目がやがて鋼橋のイノベーションに繋がるという心に響く寄稿を頂いております。

先生方にはご多忙のところ玉稿をお寄せ頂き、誠に有り難うございました。誌面を借りまして厚く御礼申し上げます。

近年、ICT技術を活用し、建設現場の生産性向上を目指すための取り組みである「i-construction」が推進されています。私たちが働く橋梁業界においても、今後予想される課題を克服し、魅力のある持続的な業界にしていくために、ICT技術を積極的に活用して設計から工場製作、架設、保全に至るすべてのプロセスを通じて「i-Bridge」化を進めていくことが必要だと考えています。今回、上記に関連し、当社の取り組み状況について、CIMを中心に具体的な事例と共に紹介しております。

また、工事報告では、時間制約のある中での橋梁の送り出し架設工法や横取り架設工法のほか、PC桁のジャッキダウン工事、特殊な建築工事、補強・補修工事など、宮地の技術を活かした施工難易度の高い工事を中心に報告しております。今後、橋梁や建築に関する技術の向上に貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、執筆者を始め多くの関係者のご協力によって区切りとなる30号を発刊することができたことに感謝いたします。

## 宮地技報編集委員会

委員長	上原正						
副委員長	平島崇嗣	百瀬敏彦					
委員	安藤正志	梅沢真悟	嬉克徳				
	奥村恭司	小原久	齊藤直政				
	菅原智	戸井口由和	永谷秀樹				
	野沢栄二	村井向一	村上貴紀				
事務局	稲田博史	田村修一					
アドバイザー	西垣登						

### 宮地技報 第30号

発行日 平成29年5月31日

発行所 宮地エンジニアリング株式会社

〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町19番19号

TEL 03(3639)2111(代)

印刷所 望月印刷株式会社